

「ガンディーの経済学 倫理の復権を目指して」

アージット・K・ダースグプタ(著)石井一也(監訳)板井広明、小畑俊太郎、太子堂正称、前田幸男、森達也(訳)

作品社 2010年10月2日刊

本書は、インド建国の父ガンディーが経済問題に関して書いたものを、インドの経済学者ダースグプタ教授が、消費行動、不平等、産業化、技術選択、受託者制度、教育などの分野に整理し再検討したものである。

著者によれば、ガンディーの経済思想は単なるユートピア思想ではなく、村人が自立して自尊心をもちながら生活していくために必要なことという極めて具体的な目標の下に構築されている。また、個人の選択において倫理的配慮と経済的配慮の両方を重視するガンディーの思想はアマルティア・センによって復権された経済学と倫理学の融合というアイディアに先行するものであり、現代経済学にも重要な視点を提供している。

インド人にとってガンディーについて書くことは決して容易ではないだろう。「偉大な魂(マハトマ)」と称されるガンディーの思想や哲学については、すでに沢山の論考があり、それなりの教育を受けた人なら必ず、ガンディーに対して一家言持っていると考えられるからである。本書の監訳者も、必ずしも著者のガンディー解釈には納得しておらず、ガンディーは個人の自由は尊重するが、完全な個人主義者ではなく、社会的存在としての人間を重視していた点、経済成長や資本主義は肯定するが、過度に物質的な生産主義からは一線を画していた点、環境保全や自然との融合を意識していた点などが著者の議論に欠けていると指摘している。

確かに、ガンディーの経済学の決定版を示すことは難しい。ガンディー自身の意見が変化し、時として矛盾しており、また、経済政策の実践のためと言うより、政治的な手段として議論をしているところもある。

しかし、あえてガンディーの経済思想を要約すると、「知足」という概念にたどりつくように思われる。これは、ガンディーの言葉では「富者が自分の所有財産をほどほどに制限するだけでも、飢えた者が容易に養われ、富者とともに満足することを学ぶだろう」と表現されている。この点について、さらに知りたければ、森本達雄(編訳)『ガンディー「知足」の精神』(人間と歴史社)などを読まれることをお勧めする。